

柏原藩歴代藩主

前期柏原藩

初代藩主 織田信包 (のぶかね)

織田信包は信長の弟にあたり、初期信長政権下では北伊勢方面の経営にあたるとともに織田一門衆として諸戦に活躍しました。

信長亡き後は豊臣秀吉に属し伊勢の安濃津 (あのづ) で15万石を領していましたが、やがて秀吉と不仲になり文禄3年(1594)には領地没収のうえ剃髪して謹慎を命じられています。

信包は豊臣政権から徳川政権へと移り代わる激動期にあって家を保つことに成功し、慶長19年(1614)大坂城内で死去しました。

2代藩主 織田信則 (のぶのり)

慶長4年(1599)信包の三男として生まれた織田信則は、慶長19年(1614)父の死去に伴い16歳で2代目藩主となりました。この時すでに伊勢林藩の藩主となっていた兄信重が信則の家督相続を不服として異議を申し立てましたが、幕府は信包の遺言に基づき信則の遺領継承を認め、逆に信重は潔くないとして領地を没収されてしまいました。

信則は寛永7年(1630)32歳で死去し江戸赤松の松泉寺に葬られています。

3代藩主 織田信勝 (のぶかつ)

織田信勝は2代藩主の信則の長男で、寛永7年(1630)3代目藩主となりました。信勝は領内の佐治川に堤防を築いたり新田の開墾を行い善政を敷きましたが、慶安3年(1650)28歳の若さで死去し世継ぎとなる男児に恵まれなかったため栢原藩は改易となりました。

信勝は八幡神社に自筆の社号額や釣灯笼を奉納するなど信仰心も厚く鳥を題材にした絵画が多く残されており、その繊細な筆跡から優しく細やかな人柄をしのぶことができます。



後期柏原藩

初代藩主 織田信休 (のぶやす)

織田信休は信長の二男信雄を初代藩主とする大和松山藩4代目藩主・織田信武の長男で元禄7年(1694)に起こった「宇陀騒動」※1の後藩主になりましたが、翌年減封のうえ丹波へ国替えの処分を受けました。

宝永元年(1704)に大和川改修の普請を命じられるなど出費が重なり、柏原に居館が完成したのは入部後20年を経た正徳4年(1714)のことで、この時城下町の建設にも着手して現在の柏原の町並みをかたちづくりしました。

2代藩主 織田信朝 (のぶとも)

初代藩主織田信休の長男として高谷北館で生まれた信朝は享保7年(1722)父の死に伴い2代藩主となりました。

享保15年(1730)幕府が諸藩の紙幣を許可したのを受けて藩紙幣を発行、翌年には藩札を相次いで発行し財政難の急場をしのぐことができましたが、増発したことによりかえって財政難を悪化させる結果となりました。

信朝は元文2年(1737)死去し子に恵まれなかったため実弟の信舊を継嗣としています。

3代藩主 織田信舊 (のぶひさ)

3代目の藩主となったのは初代藩主織田信休の二男信舊で、元文2年(1737)兄信朝の養子となり28歳で藩主を継ぎました。

信舊は父信休以来の課題であった財政難を立て直すため、端午節句の遊戯や物品贈答・宴会・絹服の着用を禁止し儉約目付という役職を新設して質素儉約を奨励するとともに、甲冑武具を修理し連兵にも励み藩内に「質実剛健」の気風を生み出し、賢君と称され74歳まで50年近く藩主の座にあったが、この間栢原藩は小康状態にありました。

天明3年(1783)柏原において死去しました。

4代藩主 織田信憑 (のぶより)

宇陀織田家の分家織田信榮の二男であった信憑は宝暦8年(1758)信舊の養子となり天明3年(1783)42歳で藩主となりました。

34年間、門衛や火消しの任等を勤めたので従四位下をいただいたが、登城も大人数となり、付き合いなどで冗費がかさみ、収集がつかなくなり、藩財政にしわ寄せされました。文政2年(1819)頃には、「おまえひとり出世して子が飢えてもかまわぬか」という俗謡がつけられました。

晩年は老齢のため藩政を長男信守に委ねましたが継嗣問題で藩内が分裂する「秘命騒動」※2が起きるなど失政が相次ぎ文化13年(1816)には陣屋も焼失して、その再建費捻出のため重税を課し農民一揆も多発しています。信憑は書画が得意で、92歳でその生涯を終えるまで多くの作品を残しています。

5代藩主 織田信守 (のぶもり)

4代藩主織田信憑の長男信守は文政10年(1827)信憑が高齢により隠居したため5代目藩主となりました。信憑在政中より藩政に参画しますが「秘命騒動」※2や「保野騒動」※3など2つの御家騒動に関与したり、藩主就任の翌年には江戸屋敷を焼失させたうえ慢性的に浪費を重ね藩財政に大きな負担をかけています。

信守の横暴な振る舞いは領民のみならず家臣の怒りを招き、家臣らは藩主の隠居を幕府に要請し、信守は就任後わずか2年で藩主の座を追われることになりました。

6代藩主 織田信古 (のぶもと)

3代目藩主織田信舊の実子信應の長男として生まれ「秘命騒動」※2で信守が失脚したあと文政12年(1829)藩主となりました。

治政の天保9年(1838)に発覚した「保野騒動」※3のため翌年信古は逼塞・先代藩主信守は遠慮・保野が終身幽閉の刑に処せられ騒動に一応の決着はついたものの、この事件が尾をひいたのか4年後の天保13年信古は隠居して、信守の長男信貞に家督を譲ることになりました。

7代藩主 織田信貞 (のぶさだ)

5代藩主織田信守の長男で6代藩主信古の養子となり天保13年(1842)藩主となりました。この年から儒学者の小島省斎を陣屋に招き藩主とともに講義を開くことを慣例化しています。

生来病気がちであったためか、弘化3年(1846)信古の娘鶴姫を養女とし、肥後国宇土細川家より細川剛三郎を鶴姫の夫として養子に迎えましたが、信貞は同年12月柏原において死去し4年間の短い治政は終わりました。

8代藩主 織田信敬 (のぶたか)

8代藩主となったのは肥後国宇土藩細川行芬の三男剛三郎で、弘化4年(1847)栢原藩主となり信敬と改名しました。信敬は駕籠を用いず徒歩で国入りをしたり綿服を着用して経費削減に積極的な姿勢を示しています。また、信敬は快活で克己心に富み、人の意見をいれる聡明な人で、藩主としての天性を備えていました。

彼は幼少の頃より学問に励んでいたため藩校「又新館」を開講したり、小島省斎を重用して藩政改革にも取り組み「栢原藩中興の名君」とうたわれましたが、嘉永6年(1853)18歳の若さで死去しました。

9代藩主 織田信民 (のぶたみ)

筑前国秋月藩主の黒田家より織田家の養子に入り、嘉永6年(1853)信敬の死去に伴い翌安政元年藩主となりました。

この年、ペリー提督の率いる黒船艦隊が来航するという不安な対外情勢を背景として、領内寺院の梵鐘を鋳直して大砲を四門鋳造したり、御所警備のため京都に出兵するなど尊皇攘夷の意を表しています。教育にも熱心で安政5年(1858)には藩校「崇廣館」を開校させましたが慶應元年(1865)死去しました。

10代藩主 織田信親 (のぶちか)

栢原藩最後の藩主となった織田信親は備中国成羽に領地を持つ交代寄合山崎家の二男で慶応元年（1865）織田家の養子となり家督を継ぐことになりました。

勤王の志が強く慶応4年（1868）に始まった戊辰戦争では討幕派に属し薩摩・長州藩らと行動を共にしました。明治2年版籍奉還の後藩知事に就任し、同4年の廃藩置県により栢原県令となりましたが、間もなく辞任して新政府の官吏となり東京に移りました。

.....

※1 宇陀騒動

織田信休の旧領大和松山藩は、信長の二男信雄が大坂の陣直後の元和7年（1615）7月に大和国宇陀郡で3万2千石の領主となったことに始まります。

初代藩主信雄のあと高長・長頼と続きましたが、元禄7年（1694）家臣団の内紛に端を發して4代目藩主信武が家臣2人を殺害のうえ自害したため、翌年幕府は宇陀の領地を没収して藩主となっていた信休に丹波に国替えを命じ栢原藩は再興される結果となりました。

※2 秘命騒動

3代藩主織田信舊は2人の男児を相次いで亡くし、自らも病に伏した宝暦8年（1758）信憑を養子に迎えましたが、その後信舊に実子の信應（のぶまさ）が生まれ、信憑の子信守と信應の子信古との間で継嗣をめぐる争いが生じました。

この時は信守が継嗣に擁立され信憑の隠居のあと藩主になりますが、藩政を危機に陥れたとして家臣団が幕府に信守の隠居を要請したため、文政12年（1829）幕府は密命により信守に隠居を命じ秘命騒動は落着きました。

※3 保野騒動

「秘命騒動」で失脚した5代目藩主信守は天保8年（1837）側室保野の住む江戸屋敷へ出達しようとしたのですが、財政難のおり旅費がかさむとして家臣団に反対され保野を栢原へ迎える画策も失敗に終わりました。

翌天保9年、保野の下女が老中脇坂安董に騒動の経過を直訴する事件が起こり、信守と保野の間に生まれた信貞と直系の信古との家督相続の問題もからみ、保野騒動と呼ばれる御家騒動にまで発展しました。